

研究紀要

第19号

2004

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

序

〔論文〕

- 砂川期の基礎的研究(2) —ナイフ形石器を廻る諸問題(上)—
.....西井 幸雄(1)
- 押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性
—絡糸体圧痕文土器の分析を通して西期を探る—
.....金子 直行(25)
- 加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック(前).....橋本 勉(87)
- 瓢箪形注口土器の成立と展開.....上野真由美(109)
- 方形周溝墓と土器Ⅱ 一概観 その1—.....福田 聖(133)
- 埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器
.....永井いずみ(169)

瓢箪形注口土器の成立と展開

上野 真由美

要旨 瓢箪形注口土器は、縄文時代中期末葉の土器として様々な分類や解釈が行われてきた。しかしながら資料の少なさなどから、その変遷や時期的位置付けなど不明確な部分も多かった。

本稿においては最近の発掘された新資料を加え、遺構の一括資料を分析の対象として分類を行い、瓢箪形注口土器の発生から展開、その終息について検討を行った。その結果、瓢箪形注口土器の盛行が後期初頭に位置づけられること、その発生や終息など他の土器群の展開と合致することが明らかになった。

はじめに

ここで取り上げるのは、注口土器の中でも中期末葉に出現する、いわゆる瓢箪形をしている深鉢形土器である。これらの注口土器については、初現期において口縁部が有孔鈔付の形状を呈していたことから、有孔鈔付土器との関係において論じられることが多かった。

その中でも、対象は中期に出土する有孔鈔付土器を中心にしたもので、中期末葉の注口土器を主たる論題として取り上げたものは少なかった。中期末葉の注口土器に限って言えば、初めて集成を行い論じたのは丹野雅人氏である（丹野1982・1985）。論文中、丹野氏は中期末葉に出現する注口土器について、有孔鈔付注口土器・瓢箪形注口土器・壺形土器に分類し、集成を行い、その形態機能・時期的位置関係・変遷過程について論じている。この論考は中期末葉の注口土器の変遷について体系的にまとめられたもので、その後の研究の基礎的な論文となっている。

また西山太郎氏は、中期末葉の注口土器について、微隆起線文を施文する鉢形土器・壺形土器・有溝小把手土器などと共に「微隆起線文土器群」と仮称して検討している（西山1986）。西山氏は「微隆起線文土器群」の祖源を有孔鈔付土器とし、「微隆起線文土器群」は両耳壺、注口付深鉢土器などの機能を借用しつつ形成されたものとした。

その後西山氏は、鈔の有無にかかわらず、注口部が装着され瓢箪型を呈する土器を、「瓢箪型注口土器」と呼称し、これらの土器群について再検討を行っている（西山2003）。その中で西山氏は「瓢箪型注口土器」の分類や分布、変遷について論じ、その出土事例から石棒祭祀との関連について指摘している。盛行時期については、中期から後期への変動期に位置するとし、その存在は複雑な社会変動の一端を示しているとした。

この注口土器を後期注口土器との関連で触れたのが、池谷信之氏である（池谷1990）。池谷氏は、関東・東北地方の中期末から後期前葉の注口土器について検討を行い、関東と東北における注口土器の年代と形態的な系統性について論じている。

また後期の注口土器の成立に関連しては、鈴木徳雄氏の論考がある（鈴木1994）。その中で鈴木氏は、瓢箪形の注口土器を甕形注口土器とし、その変化について遺構の一括資料を対象として、型的な検討を行い、単体で出土する資料も加え系統的な変化を推定した。そして甕形の注口土器を、注口土器のひとつの類型として捉え、千鳥窪出土例から「千鳥窪類型」と呼称した。

以上のように、いわゆる瓢箪形の注口土器については、様々な観点から分析がなされてきた。しかしながら出土例の少なさや、単体で出土する例も多いことから、その変遷については不明瞭な点が多いのが現状である。既に丹野氏の論考から20年が経過しており、出土例も増加したことから、今回改めてその変遷について考えてみることにしたい。

その方法に関しては、前述の鈴木氏に類似するが、まず対象資料を遺構出土の注口土器に限定し、一括資料をもとに分類、変遷を考え、その後単体出土の注口土器に関しても、それらの中に位置付けたい。

また、対象となる注口土器に関しては、胴部でくびれる深鉢の形状をしているもので、基本的に微隆起線文を施文するものに限定した。注口土器の呼称については、ここでは単純に形が瓢箪に似ているという点から「瓢箪形注口土器」とする。

1 各期の遺構出土の瓢箪形注口土器と共伴土器

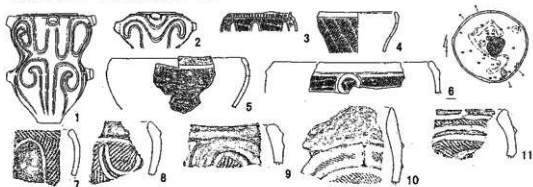
I期 (第1図)

瓢箪形注口土器が出現した段階である。共伴する土器は加曾利E式では、波状沈線と磨消懸垂文の組み合ったモチーフを持つ吉井城山類や、隆帯による大柄な渦巻文が描かれる槌山類が盛行する段階である。この期の吉井城山類の文様は胴部くびれ部で上下に分帯され、槌山類では文様の隆帯が断面三角形の微隆帯となっている。また口縁部を沈線や微隆起線によって区画し、胴部には地文のみを施文する粗製的な土器も見られるようになる。住居跡の形態としては、同じ段階と考えられる神奈川県横浜市猿田遺跡10号住では柄鏡形住居跡の形をとっており、広域的には柄鏡形住居跡が出現した段階と考えられる。

1~11は江原台遺跡103号住居跡から出土した土器である。1と2が瓢箪形注口土器である。出土状況は炉跡を中心にして、東側と西側のやや壁際にわかれ対称的な位置で検出されている。1は有孔鈔付の口縁部で、孔は鈔部分に10箇所があげられている。注口部は口縁直下につけられている。また注口部を中心にして左右対称に、上下方向に穴が開く把手が口縁直下と胴下部に2個1対で2箇所貼付されている。文様は微隆起線によって、胴上部と下部に分かれ渦巻き状の文様をそれぞれ4単位施文している。胴下部の文様の下端部分は開いている。2は胴下部が欠損する。有孔鈔付の口縁部で、鈔部分には円孔が8箇所穿孔されている。1に比べ胴部のくびれ部分より口縁部側が上下方向に幅が狭くなり、口径も狭くなっている。注口部は口縁直下につけられ、把手も1と同様に左右対称的に貼付されている。文様も微隆起線によって施文される。3と7は胴部に逆U字文を沈線で施文する。9~11は微隆起線によって渦巻き文などを施文する槌山類の破片である。

12~15はキサキ遺跡2号住から出土した土器である。12は床面から出土した瓢箪形注口土器である。有孔鈔付の口縁部で、鈔部分には4箇所2個1対で8つの円孔が穿たれている。口縁直下に注口部をつけている。口縁直下と胴下部には注口部を中心に剥離の痕跡があり、把手がつけられていたと考えられる。施文される文様は2と類似しているが、胴中央付近から胴下部はほとんどが欠損しており、文様の下端の処理などは不明である。13と14は沈線で逆U字文を胴部に施文するものである。15は2本1対の沈線で文様施文する。

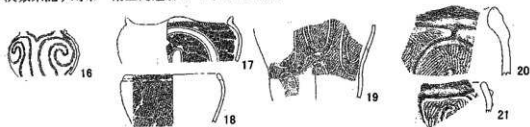
千葉県佐倉市 江原台遺跡 103号住



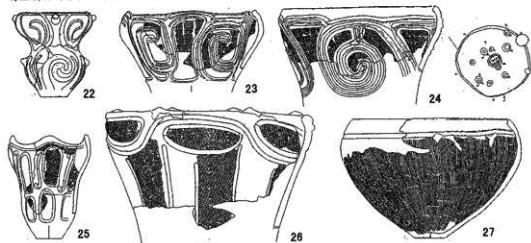
千葉県香取郡大柴町 キサキ遺跡 2号住



茨城県龍ヶ崎市 南三島遺跡 6・7区 194号土



埼玉県日高市 宿東遺跡A区 16号住



第1図 I期 甕柄出土土器

16~21は南三島遺跡6・7区194号土壇出土の土器である。16は覆土中から出土した瓢箪形注口土器の胴下半である。微隆起線によって渦巻き状の文様を施文する。文様の下部部は破損のため不明である。器形は胴下部が1や12に比べるとやや上下方向に圧縮されている。17は胴上部の破片で、間を磨り消す2本沈線で渦巻き文を施文する。19は胴部の破片でくびれ部分を境に上部と下部に文様が分かれるもので、上部には間を磨り消す2本沈線で楕円形文様を施文する。下部には1本沈線で逆U字文を施文する。20と21は微隆起線で渦巻き文を施文する椀山類の土器片である。

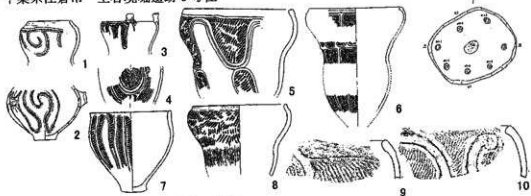
22~27は宿東遺跡A区16号住居跡から出土した土器である。22は瓢箪形注口土器の胴下半部である。上下方向に穴が開く把手が残存しており、1と同様上下に2個1対で注口部を中心に左右に貼付されたと考えられる。文様は微隆起線で入り組み状に渦巻き文が2単位施文されている。23は口縁直下に無文部を持たない、沈線によって渦巻き文を施文する土器である。24は埋甕で微隆起線によって大柄渦巻き文を施文する椀山類の土器である。25は沈線で上下にそれぞれ楕円文様を施文するもので、文様の間には鍔手文が施文される。26は炉体内周に使用された土器で、口縁部文様帯が残る土器である。27は炉体外周の土器で、楕円状の条線が地文として施文される浅鉢である。

II期 (第2~4区)

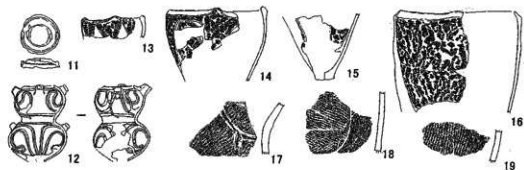
称名寺式土器では、最古段階と考えられる土器が共存する。また加曾利E式の土器群については、前段階の吉井城山類など沈線文系の上層の多くは、胴下部に沈線によって逆U字状に磨消懸垂文を施文していたものが、逆V字状に施文するようになる。また微隆起線文系土器は椀山類から、吉井城山類と椀山類の影響下において発生したと考えられる、上下の文様帯が融合した岩坪類へと主体が移行している。また、口縁部からくびれることなく底部にいたる大形の深鉢が多くみられるようになる。それらの多くは、懸垂文を沈線や微隆起線で施文して間を磨消文と地文で交互に埋めていくという粗製的な土器である。それらの土器を出土した住居跡の形態はそのほとんどが柄鏡形を呈するようになる。

第2図1~10は生谷境堀遺跡9号住居跡出土の土器である。1と2は別個体の瓢箪形注口土器である。1は胴上部の破片である。口縁部は内傾して微隆起線によって胴部と区画され、鈎状にはなっていない。前段階に比べると胴上部は上下方向にせばまり、口径は小さくなり全体的に小形化している。文様は微隆起線によって施文され、口縁部の区画文に連結させて渦巻き状に6単位施文されている。それぞれ文様は空間が閉じており、単位文化している。2は胴下半のみが残存するもので、1に比べ微隆起線の稜がより鋭角的となっている。第1図1や16の文様と類似するが、文様の下端は閉じており単位文化している。また底部もやや高さを持って作りだしている。やはり1期と同様の把手が貼付されている。3は口縁部に突起を持つもので、口縁部に巡らす沈線文は突起にそって口縁部を区画するように施文される。また胴上部に施文される波状文は、突起部分で他より口縁部側に突出するように施文されている。4は2本1組の微隆起線によって、大柄の渦巻き文を施文しており椀山類に含まれる。5は吉井城山類で、上下に分帯されている沈線文が、対向するように6単位施文される。上部の波状文の頂部は口縁部の区画文と接続しており、

千葉県佐倉市 生谷境堀遺跡 9号住



千葉県佐倉市 六崎貴舟台遺跡 31号土



千葉県佐原市 多田遺跡 374号土



茨城県龍ヶ崎市 南三島遺跡 3・4区 69号住



第2圖 Ⅱ期 通橋出土土器 (1)

文様が附じた状態となり単位文化している。6の隆帯は部分的にはあるが、ほとんどが微隆起伏となっておらず古い様相を持つ上甗である。7は1段懸垂文類といえる土器で、逆U字文は部分的に卍字状となっている。8は地文のみの土器である。9と10は岩坪類と考えられる微隆起線文を施す土器片である。

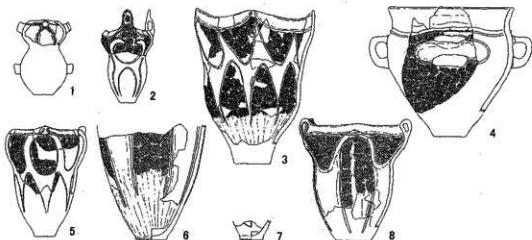
第2図11~19は六崎貴船台遺跡31号土壇から出土した土器である。11は12の瓢箪形注口土器の蓋と考えられるもので、径も瓢箪形注口土器の口径に合うものである。口縁部の傾きに合うように蓋の内面はつくられている。外側には2個1対の橋状把手が貼付されていたと考えられる。12は底部を破損するが全体の形状がよく残る瓢箪形注口土器である。微隆起線によって口縁部を区画するが、鏝はつかない。第2図1と同様に口縁は内傾する。注口は口縁部直下につけられ、上下方向に穴が開く把手も、1期と同様の位置に貼付される。胴上部、下部ともに上下方向にせばまり、全体に小形化している。また胴下部よりも胴上部が最大径は小さくなっている。注口部分の根元部分に横方向に凹孔を貫通させ、注口のちょうど反対側の口縁部に刺かれたような痕跡があることから、あるいは同様な凹孔を貫通させた把手のようなものが貼付された可能性もある。文様は微隆起線によって施文され、口縁の区画文に連続させてJ字文に近い渦巻き文を4単位施文している。胴上部と下部はそれぞれ1本ずつ、微隆起線によって区画される。胴下部の文様は、2個の逆向きの渦巻き文を結合させたような単位文を2単位施文している。13は沈線によって逆V字状文を施文する。14は岩坪類と考えられる土器で、15は微隆起線によって、間を大きく開けた懸垂文を縦方向に施文する粗製的な深鉢である。16は地文のみ施文される。17は崑山類と考えられる土器片である。

第2図20~25は多田遺跡374号土壇から出土した土器である。20は瓢箪形注口土器の胴下半と考えられる土器である。小形しているもので、第2図1、2、12と比べると胴下半はやや縦長状となる。把手が1対貼付されるのは他と同様である。文様は12と同様に、対向する渦巻き文がつながった単位文と考えられるが、上部との関連は不明である。21は微隆起線を懸垂させている。22は微隆起線で口縁部を区画する。23は口縁部に枠状区画を施文して、下端にJ地文を連続させている。25~27は岩坪類の破片である。

第2図28~33は南三島遺跡3・4区69号住居跡から出土した土器である。28は瓢箪形注口土器で口縁部の大半と底部を欠損する。注口部は口縁直下につけられる。把手が胴部に貼付され、他と同様であったと考えられる。器形は口縁部側に比べ、下半が小さくなるもので、20と同様胴下半部分はやや縦長となっている。文様は微隆起線によって胴下半には、単位文化した渦巻き文を施文している。把手に沿って胴上部から下部にかけて、変形した楕円状の区画文を施文している。31は鉢形の土器で、地文のみを施文する。他は深鉢で口縁部を沈線や微隆起線で区画し、胴部には地文のみを施文する粗製的な土器である。

第3図1~8は浅間東遺跡1号土壇出土の土器である。1は瓢箪形注口土器の口縁周辺の破片である。注口部は口縁直下につけられ、注口を中心とした側面には把手が貼付され、他と同様上下1対で両側に配されていたと考えられる。口縁直下の胴上部は上下方向に圧縮されるように、内湾が強くなり、胴下部に対して小形化が進んでいる。微隆起線によって施文されるが、注口下

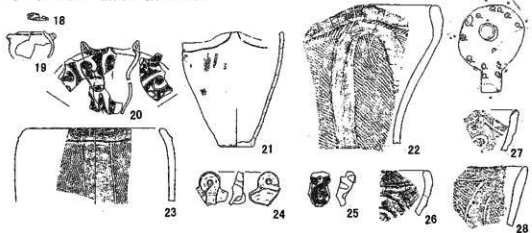
埼玉県北葛飾郡松伏町 浅間東遺跡1号土



埼玉県さいたま市 指扇下戸遺跡4号住



埼玉県上尾市 宿前Ⅲ遺跡2号住



第3図 II期 遺構出土七器(2)

に縦長の楕円状と見られる文様の1部が残るのみである。表面には朱塗りか施されている。2は高く伸びる橋状把手のつくもので、口縁部は微隆起線で区画される。3は波状口縁部で、口縁部は沈線によって4単位に区画されている。胴上部の沈線文は口縁部の区画文と連結され、区画文化されている。胴下半は逆V字状に文様を施文している。8は3と構成は同様だが、胴上部に抱球文を施文している。4は岩坪類で、逆U字状文様の頂部直上にあたる口縁部区画文上には、舌状の突起を貼付している。

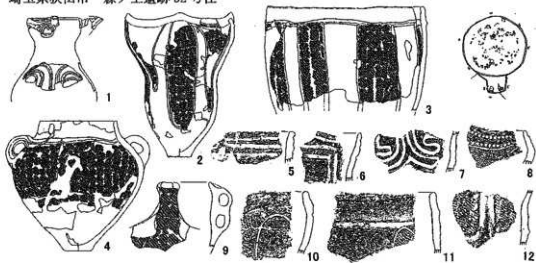
第3図9～17は指扇下戸遺跡4号住居跡出土の土器である。9は瓢箪形注口土器の胴下半の破片である。12と15が入れ子状になって出土した埋甕の、15を覆うような形で出土している。第2図2と非常に良く似た器形と文様構成をとっている。10は屈曲の強い胴上部に、沈線でJ字文を8単位施文する。胴下部には逆V字状に沈線文が施文されている。11は微隆起線で口縁部下を区画するように施文している。13はミニチュア土器である。15は口縁部を区画する微隆起線文上に1箇所粗雑な粘土網を貼付している。16は岩坪類と考えられる口縁部の破片である。

第3図18～28は宿前Ⅲ遺跡2号住居跡出土の土器である。18は蓋の破片で、穿たれた円孔が確認できる。19は瓢箪形注口土器と見られる口縁部から胴上部の破片である。口縁は内傾しており、微隆起線によって胴部と区画される。残存している破片には胴部の文様は確認できない。口縁部下には上下方向に穴が開けられた把手が貼付されている。器形的には第3図1と類似している。20は4単位の波状口縁で、把手が2箇所貼付される。胴上部にはJ地状の沈線による区画文が施文されると考えられる。胴下半には逆V字状に施文される。21は埋甕で口縁部を区画するように沈線文が施文されている。23は21を取り巻くように出土した土器である。22、26は微隆起線を施文する岩坪類の土器の破片である。24と25は土器の把手部分である。27は口縁部に棒状に区画文を施文するものである。

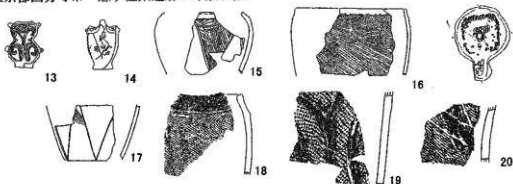
第4図1～12は森ノ上遺跡32号住居跡から出土した土器である。1は瓢箪形注口土器で、口縁部の破片と胴下部の破片で、接点はないが残存する破片から同一個体と考えられるものである。口縁部は微隆起線によって区画され、内傾している。注口は口縁部直下につけられ、注口を中心にして側面部分には上下方向に貫通する把手が貼付される。口縁部の上下方向の圧縮は進んでおり、口縁下で屈曲が強くなっている。また胴部も下膨れの形状となっている。文様は残存部からすれば、上下にそれぞれ渦巻き文が施文されている。2は沈線で施文される岩坪類である。3は微隆起線で懸垂文を施文する大形深鉢である。5～7は口縁部に棒状の区画文を施文して、J字文などを施文するものである。いずれも沈線が深く削られ、しっかりと施文されるものである。10と11は沈線文によって懸垂文が施文される。12は微隆起線による岩坪類の破片と考えられる。

第4図13～20は志ヶ窪東遺跡5号敷石住居跡から出土した土器である。13はかなり小形のもので、器形的には第2図12と類似するものである。上下方向に穴が貫通する把手も胴上下1対で2箇所に貼付されている。文様はお互い逆に向く渦巻き文を、上下それぞれ施文している。文様の下部は閉じている。2は1と同様に小形の深鉢で、口縁部は微隆起によって区画される。胴部の沈線による文様は規則性がなく施文されている。15と17は逆V字の沈線文によって、鋸歯状に施文されている。16と18は口縁部が微隆起線によって区画され、胴部は地文のみ施文される。

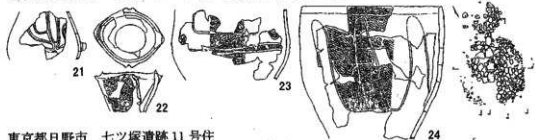
埼玉県狭山市 森ノ上遺跡 32号住



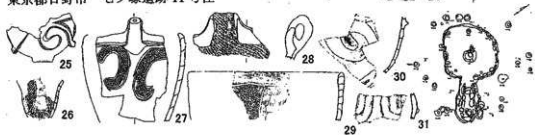
東京都国分寺市 恋ヶ窪東遺跡 5号敷石住



東京都八王子市 多摩ニュータウン遺跡No.67 遺跡1号住



東京都日野市 セツ塚遺跡 11号住



第4図 II期 遺構出土土器 (3)

19は梶山類の破片と考えられる。

第4図21～24は多摩ニュータウン遺跡No.67遺跡1号住居跡の出土土器である。21は瓢箪形注口土器の胴下半の破片である。上下方向に貫通した把手が貼付される。器形は第4図1同様、やや縦長の下膨れとなっている。文様は破片のため詳細は不明だが、やや複雑化している。22は沈線文だが岩坪類と同様の文様構成になると考えられる。23は杵状区画文の土器の、文様の下端にあたると考えられる。J字文の1部と見られる文様が残っている。24は大形深鉢で、逆U字文が粗雑に施文される。

第4図25～31は七ツ塚遺跡11号住居跡出土の土器である。25は瓢箪形注口土器の胴下部から底部の破片である。器形は第2図2と類似している。上下方向に貫通する把手が2箇所貼付されている。文様は微隆起線によって渦巻き文施文され、文様の下端は閉じている。27は沈線により、C字状の単位文様が胴部に施文されている。口縁部には横状把手が貼付されている。29は大形深鉢で、沈線によって懸垂文を施文している。30、31は壺形となると考えられ、あるいは25と同様注口土器の破片とも考えられる。

Ⅲ期（第5・6図）

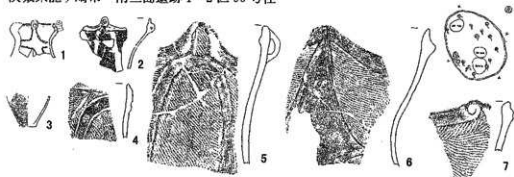
称名寺式土器においては、2段のJ字文が盛行する段階である。今村喜爾氏の1b段階（今村1978）、鈴木徳雄氏の2・3段階に相当する（鈴木1990）。加曾利E系列の土器はこの段階においては、岩坪類や大形深鉢などはそのまま残る。吉井城山類の系列と考えられる上下2段構成の沈線文土器は文様が粗略化し、一段の懸垂文土器も同様の傾向にある。また波状口縁で波頂部間を弧線文と口端線で区画された縄文帯、くびれ下の胴部にはJ字文の文様帯が1段配される関沢類もこの段階に出現する。

第5図1～12は南三島遺跡1・2区99号住居跡出土の土器である。1は瓢箪形注口土器の胴上部の破片である。胴のくびれから上部分の上下方向の円縮は、さらに進んでいるといえる。口縁部下の屈曲も強くなっている。前段階にひきつづき、胴下部は縦長になり下膨れ状になると推定される。注口は口縁直下につけられている。また注口の上半分には、横方に貫通する穴が開けられ横状把手のようになる。微隆起線による文様は、口縁部下は6と同様に関沢類に見られる区画文様が施文されている。胴下部には渦巻き文などが施文されたと考えられる。2は沈線文による、5は微隆起線による岩坪類である。6は関沢類の口縁部の破片である。

第5図8～12は砂川遺跡21号土壇出土の土器である。8は注口と把手が残る口縁部の破片である。口縁部下で屈曲して胴上部の幅が狭くなっているものである。口縁部直下に注口はつけられているが、上下方向に貫通する把手はここでは横方向にも貫通している。11は関沢類、12は岩坪類の破片と考えられる。

第5図13～17は長田雉子ヶ原遺跡100号住居跡出土土器である。13は瓢箪形注口土器のほぼ完形品である。器形は胴部のくびれ部は口縁部直下で屈曲したすぐ下に位置し、くびれ部より下は縦長に伸び、胴下部の最大径部分は底部付近まで下がり、口縁部と同様にえらが張るような強い屈曲を持つようになっている。注口は口縁直下につけられるが、注口の根元部分には横方向に

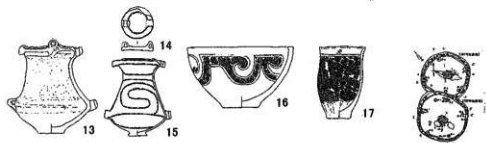
茨城県龍ヶ崎市 南三島遺跡1・2区99号住



茨城県水戸市 砂川遺跡21号土



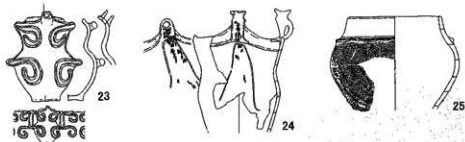
千葉県成田市 長田権子ヶ原遺跡100号住



千葉県印旛郡白井町 神々廻遺跡17号住



神奈川県横浜市 羽沢大道遺跡39号土



第5図 III期 遺構出土土器(1)

貫通する橋状把手が貼付され、注口に対向する口縁部にもう一箇所橋状把手が貼付されている。これは第5図1と共通する。上下方向に穴が貫通する把手は胴上下1対で2箇所、従来通りに貼付されている。胴部には文様は施文されていないが、ミガキ成形がなされ所々に赤彩の痕跡が観察されている。15は13と同様瓢箪形注口土器と考えられるが、注口部は検出されていない。器形は13と同様である。文様は微隆起線によって施文され、杵状の区画文や渦巻き文などが施文される。外面全体に赤色塗彩痕が認められている。14は15とセットになって検出された蓋で、蓋の規格は15の口縁部区画内の規格と合致している。蓋の外面には横方向に貫通する把手が2箇所貼付される。内外面全体に赤色塗彩痕が見られている。16は鉢形土器で、無文のJ字文と縄文充填された帯状の文様帯が、地と岡が反転するように施文されている。17は小形の深鉢で一部に赤色塗彩痕が認められた。

第5図18～22は神々廻遺跡17号住居跡から出土した土器である。18と19は瓢箪形注口土器の破片である。注口部分は失われているが、器形は第5図13と類似する。文様は胴上部には第5図1の口縁部下と同様の、関沢類の文様が施文される。胴下部には渦巻き文が施文される。19は壺形土器で、J字文などが帯縄文によって施文される。21は沈線によって粗雑に文様が施文される。

第5図23～25は羽沢大道遺跡39号土壘出土の土器である。23は瓢箪形注口土器である。胴上部と胴下部の最大径部分は、えらが張るような屈曲を持っている。注口は口縁部直下につけられ、上下に貫通する把手も胴上下1対で2箇所貼付される。文様は微隆起線によって、渦巻き文を上下に同じ文様を施文して、把手部分を囲む微隆起線文によって上下の文様は連結されている。24は胴部の文様は粗略化している、沈線による1段懸垂文の土器である。

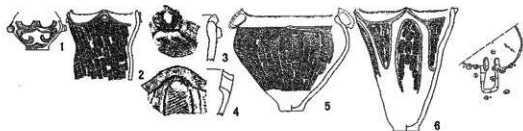
第6図1～6は黒谷田端前遺跡5号住居跡出土土器である。1は瓢箪形注口土器の胴下半部である。胴下半の最大径部分が屈曲してえら状になっている。最大径部分には上下方向に貫通する把手が、対称となる位置に貼付される。文様は微隆起線によって施文され、最大径部分を境のように上下に渦巻き文を施文して、その内側に丹塗りをしているという。それは文様区画内の把手などにもされている。2は微隆起線によって波状口縁を弧状に区画し、波頂下に渦巻き文を配している。4と6は岩坪類の土器である。5は埋塞に使用された両耳壺である。

第6図7～11は血沼遺跡7号住居跡出土の土器である。7は瓢箪形注口土器の胴下部の破片で、器形としては第6図1と同様であると考えられる。文様は第6図1と同様に胴下部最大径部分を境として杵状の区画文や、渦巻き文などを施文している。8、9は帯縄文によってJ字文などの文様が描出されるもので、口縁部の区画文は残るものの前段階よりも文様がくずれて、新しい様相を示している。

第6図12～14は八幡沼遺跡1号住居跡出土土器である。12は胴下半の破片で、器形はやはり第6図1.7と同様に胴下半最大径部分がえらを張るように屈曲している。文様は微隆起線により、渦巻き文などを施文している。13は胴上部無文となる深鉢で、胴部下側には残存部分から、第5図16と同様の文様が施文されると推定できる。3は鋸歯状の沈線文が施文されていたと考えられる。

第6図15～18は下佐野遺跡77号土壘から出土した土器である。15は瓢箪形注口土器で、口縁部直下で屈曲し、すぐ胴部のくびれとなるもので、他と同様に胴上部が上下方向に圧縮されるよ

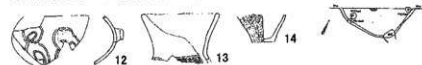
埼玉県岩槻市 黒谷田端前遺跡 5号住



埼玉県南埼玉郡白岡町 皿沼遺跡 7号住



埼玉県蓮田市 八幡沼遺跡 1号住



群馬県高崎市 下佐野遺跡 77号土



山梨県大月市 大月遺跡 13号住



第6図 Ⅲ期 遺構出土土器 (2)

うな形となっている。注口は口縁部直下につけられ、それを中心に、両側に上下方向に貫通する把手が貼付されている。文様は微隆起線によって、渦巻き文などが施文されている。赤色塗彩がなされている。16は内外面に赤色塗彩、内面に漆塗布が見られた土器で、上下方向に穴が貫通する把手が胴上下1対で2箇所貼付される。

第6図19～26は大月遺跡13号住居跡出土の土器である。19、20は瓢箪形注口土器で、19は口縁部の破片と考えられる。20は胴上部を欠損している。胴部は球形に近いもので、器形としては他の様相とは違いが見られるが、時期的な違いがあるのか変化の過程の相違かは不明である。文様は渦巻き文を施文する。21、22、24は帯縄文によって文様が施文されるもので、22は無文のJ字文などが描出される。23は微隆起線によって文様が施文されるもので、岩坪類と見られる。25と26は波頂部に、捻転状や対弧状の突起が貼付される関沢類の土器である。

IV期（第7・8図）

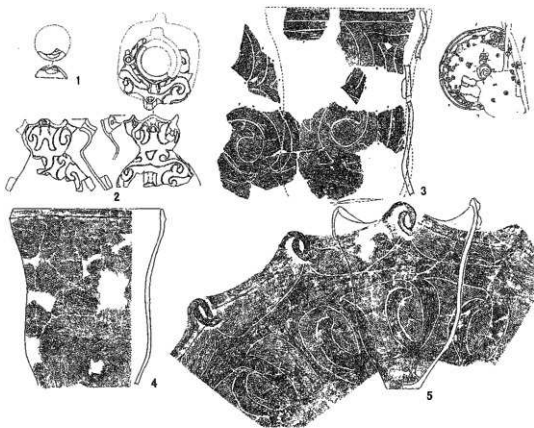
称名寺式では今村氏の1c式、鈴木氏の4段階にあたる。称名寺式上層の2段の文様の間に入っていた横方向の帯縄文はなくなり、見た目上は上下2段に分断された印象は薄くなっている。加曾利E系の土器は、大形深鉢の微隆起線や沈線による懸垂文や区画文の土器や、岩坪類などが残存する。関沢類の土器も見られる。この期の住居跡の形態は柵形で、その柵部は方形で幅広となっている。

第7図1～5は水深西遺跡7号住居跡から出土した土器である。1は2の蓋と考えられるもので、外面には剥離痕がみられ、なんらかの把手が貼付されていたと考えられる。2は瓢箪形注口土器で底部を欠損する。口縁部は4単位の波状口縁で、内側に蓋受部分が作られている。注口は口縁につながるように作られ、注口の口には捻転状に粘土紐が施文される。注口の口縁部の間には横方向に穴が横方向に貫通するように、橋状につなげており、欠損した反対側にも同様の橋状把手が存在したと考えられる。また注口を中心に側面部分に上下方向に貫通する把手が口縁に直結する箇所と胴部最大径部分に貼付されており、反対側にも同じように存在していたと考えられる。また器形の大きな特徴として、くびれより上部は円形であるが、胴下部は上から見た場合は隅丸方形を呈しているということである。文様は微隆起線によって渦巻き文などを細かく描出する。3の土器は、上下2段のJ字文を施文して、間にも文様を充填している。5は関沢類の土器で、突起部分に2の注口と同様の捻転状の突起を貼付している。

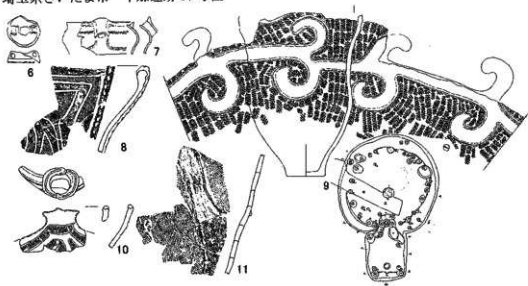
第7図6～11は下加遺跡53号住居跡出土土器である。6は蓋で、外面に1対の橋状把手を貼付している。7は瓢箪形注口土器で、口縁の内側に蓋受となる部分を作り出している。そのため上下方向に貫通する把手は第7図2と同様に口縁部に直結して取り付けられている。8は刻みを有する帯帯を、口縁から底部近くまで懸垂させるものである。9は関沢類に含まれると考えられ、口縁部の弧状区画の一部が見られる。胴部の文様はより簡略化されたようである。10は筒状の突起がつくものである。11は岩坪類と考えられる。

第8図1～3は川又坂上遺跡5号住居跡出土の土器である。1は小形化した瓢箪形注口土器である。口縁直下に注口がつけられ、把手も胴上下1対で注口を中心に2箇所貼付されている。文様は上下2段の渦巻き文を、連結させて施文している。2は連結する上下2段の文様を隙間なく施文して、文様を描出している。3は口縁部を沈線で区画している。

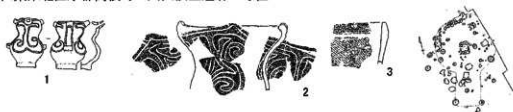
埼玉県さいたま市 水深西遺跡7号住



埼玉県さいたま市 下加遺跡53号住



第7圖 IV期 遺構出土土器(1)



第8図 IV期 遺構出土土器 (2)

2 瓢箪形注口土器の変遷 (第9~11図)

前項では同じ遺構から出土した土器の時期に従って、瓢箪形注口土器をI~IV期に区分しそれぞれ遺構ごとの共伴する土器の様相や、住居跡の形態などに触れてきた。その結果、时期的なまとまりや変化について、ある程度方向性が窺えた。そのためここでは単体で出土した土器を含め、瓢箪形注口土器の変遷について改めて考えてみたい。

I期の瓢箪形注口土器 (第9図1~7)

瓢箪形注口土器、または他の器形の注口土器も、瓢箪形注口土器を出土する地域においては、この段階より前には出土が認められなかった。この瓢箪形注口土器の成立に関しては、有孔罅付土器との関連が指摘されてきたが、深鉢という形態をとることなどから他の要素があったとの指摘もある(田川1980、丹野1982・1985)。丹野氏が指摘するように(丹野1982)1の器形などは吉井城山類や梶山類の器形そのものである。有孔罅付土器は、加曾利E式においては鉢形土器にみられる特徴であった。東北地方などでは、鉢形の輪形に注口がつけられている。瓢箪形注口土器が、有孔罅付土器の系統上にあるならば、鉢形の土器に注口土器が移行したと考える方が自然のように思われる。またI期に存在していた有孔罅付の注口土器は、II期の一部をのぞいて、それ以降には現れなくなる。II期になると瓢箪形注口土器は、口縁部の径が小さくなり、土製の蓋が作られるようになる。つまりI期の有孔罅付の注口土器は、単に蓋に利用するための施設であったと考えられ、有孔罅付の注口土器は系統上の問題ではなく、機能上付帯されたとも考えられる。しかしながら、深鉢になぜ注口を付けたのは依然不明であり、今後の課題としたい。

I期の瓢箪形注口土器だが、出現段階では前述したように器形的には吉井城山類、梶山類と同様の胴部中位でくびれる器形である。また瓢箪形注口土器が、胴部のくびれを境にして上下を分帯して文様を施文すること、梶山類の文様描出に見られるように断面三角形の微隆起線によって文様を描くことなどから、その成立に関しては吉井城山類と梶山類の深鉢との関連は深いと考えられる。また瓢箪形注口土器のI期からIV期のすべてに共通する、口縁部直下に注口をつけること、上下方向に穴が貫通する把手を、胴上部と胴下部の2個1対で、注口を中心に両側に貼付することは、I期からすでに定着している。この把手は深鉢の両脇に把手をつけて、液体を注ぐという発想からきたものと思われ、3の新戸遺跡出土の瓢箪形注口土器では、ジョッキにつけるような把手が胴上部と下部をつないでアーチ状にかかっている。おそらくは反対側にも同じようについていたものと考

えられる。

以上のことからⅠ期の瓢箪形注口土器は、他の深鉢形土器と比較しても器形的にも火きさ的にも同様であること、文様的には上下が分帯して施文され、下段の文様の端部は閉じずに開いていることが特徴である。またⅠやⅦにみられるような胴下部の特徴的な文様は、椀山類や吉井城山類には見られないもので、周辺地域の土器との関連などが考えられる。

Ⅱ期の瓢箪形注口土器 (第9図8~26)

Ⅱ期になると大きな変化が訪れる。17と18がセットで出土したように、蓋形土器が出現する。それに合わせるように、口縁部は狭く作られ蓋受けのため、口縁部は内傾するようになる。また口径が小さくなったことにより、胴部のくびれ部から口縁部側が上下方向に圧縮され、全体的には下膨れの形状となり、より瓢箪形に近いものとなっている。有孔鋳付のものは、13などではみられるが他にはなく、蓋の存在によって有孔部が作られなくなったと考えられる。文様においてもⅠ期では下端が閉じなかった文様が、Ⅱ期においては下端が閉じて単位文化するようになる。これは称名寺式土器や大木10式土器との関連において、瓢箪形注口土器の文様も連動していたことがわかる。

Ⅱ期とした瓢箪形注口土器の中でも新旧はあると考えられ、器形的には9、11、12、16、13、18は胴下半部が球形に膨らむもので、胴上部も下部に比べ小さくはなっているが、顕著ではない。それに比較し10、19、20~26は胴下半が縦長となり、下膨れのピークが底部に近くなっている。また胴上部の圧縮も進み新しい様相を示しているといえる。それらの瓢箪形土器のほとんどが、称名寺式土器と共存している。

性格的には、16や24のようにミニチュアに近い小形のものも作られていることから、瓢箪形注口土器が実用よりは、儀礼的な意味合いがあったとも考えられる。

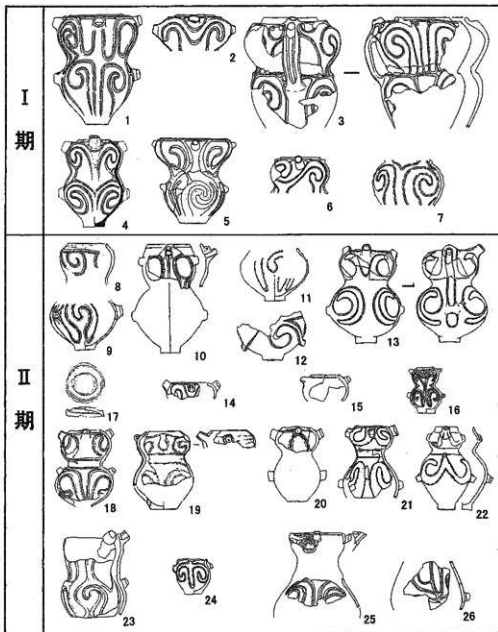
Ⅲ期の瓢箪形注口土器 (第10図1~16)

Ⅲ期になると瓢箪形注口土器の器形は、胴上部の圧縮化がさらに進む。また口縁部直下と胴下部の最大径部分は屈曲し、えら状に張り出す傾向にある。また4、14、16のように口縁部直下はえら状に張り出すものの、胴部に関しては球状となる1群も存在する。系列の違いか時期差かは、事例が少ないため不明だが、Ⅳ期では胴部にまた丸みを帯びるようになるため、どちらかといえば時期差を示すものと思われる。

文様については共存する土器などの影響を受けて、個々に変容するため統一性はほとんど見られないが、渦巻き文という基本は変容していないようである。

Ⅳ期の瓢箪形注口土器 (第10図17~23)

Ⅳ期になると、口縁部の形状などに変化が見られるようになる。18、21、23のいずれの土器も外側から見える口縁部より低い位置の内側に、蓋受け部分を作り出している。そのため注口や把手も口縁部に直結して貼付されるようになり、口縁部は4単位の波状の形状となっている。またⅡ期やⅢ期にも見られたものの、鉢形注口土器などの口縁部に貼付されている、釣手状把手となる横方



1.2 江原台遺跡108号住

3 相模原市 新戸遺跡

4 キヤキ遺跡2号住

5 宿東遺跡A区16号住

6 菟山市 富士見台第II遺跡

7 南三島遺跡6・7区194号土

8.9 生谷境遺跡9号住

10 佐倉市 吉見台遺跡

11 沼瀬下戸遺跡4号住

12 セツ塚遺跡11号住

13 さいたま市 白銀遺跡

14 谷和原村 前田村遺跡

15 宿前田遺跡2号住

16 志ヶ窪東遺跡5号敷石住

17.18 六崎賣舟台遺跡31号土

19 千葉市 すすき山遺跡8号住

20 浅間東遺跡1号土

21 郡山市 北向遺跡

22 さいたま市 B-53号遺跡

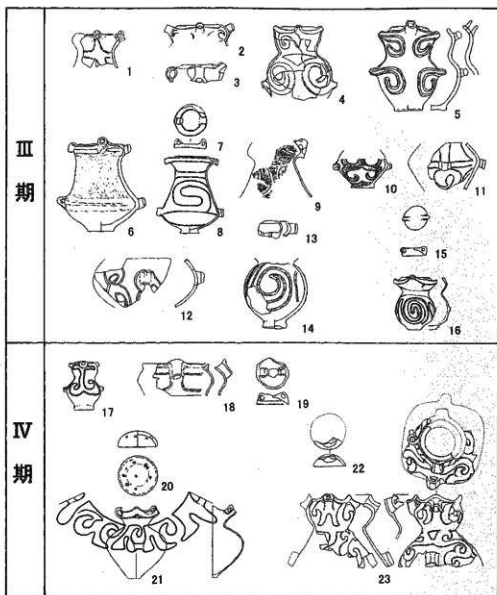
23 南三島遺跡3・4区69号住

24 多田遺跡374号土

25 森ノ上遺跡32号住

26 多摩ニュータウン遺跡No.67遺跡1号住

第9図 各期の瓶形注口上器 (1)



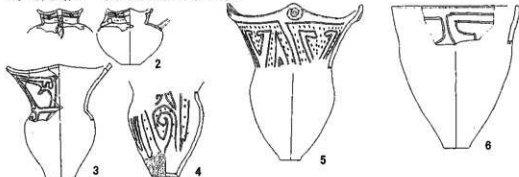
- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 南三島遺跡1・2区99号住 | 11 嵐石遺跡7号住 |
| 2 下佐野遺跡77号土 | 12 八幡沼遺跡1号住 |
| 3 砂川遺跡21号土 | 13.14 大月遺跡13号住 |
| 4 稲城市 多摩ニュータウン遺跡№3遺跡 | 15.16 郡山市 上納豆内遺跡78号住 |
| 5 羽沢大道遺跡39号土 | 17 川又坂上遺跡5号住 |
| 6.7.8 長田塚子ヶ原遺跡 100号住 | 18.19 下加遺跡53号住 |
| 9 神々塚遺跡17号住 | 20.21 千葉県佐倉市 江原台遺跡 |
| 10 黒谷田崎前遺跡5号住 | 22.23 水深西遺跡7号住 |

第10図 各期の銅范形注口土器(2)

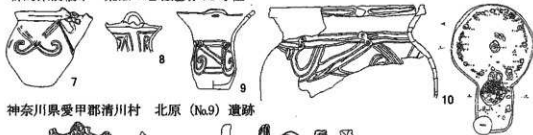
福島県南会津郡田島町 長野遺跡



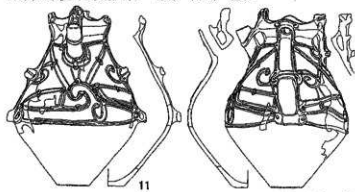
埼玉県岩槻市 裏慈恩寺東遺跡 3号住



群馬県前橋市 荒砥二之塚遺跡 34号住

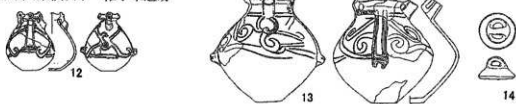


神奈川県愛甲郡清川村 北原 (No.9) 遺跡



山梨県都留市 中谷遺跡

神奈川県横浜市 帷子峯遺跡



第11図 IV期以降の甗形注口土器

向に穴が貫通する橋状把手が、注口の根元部分とそれに対比する位置に貼付されることが特徴的な事象である。17に関しては、ミニチュア化しているためか、形状が前段階に近い。

IV期以降の瓢箪形系の注口土器（第11図1～13）

IV期以降の瓢箪形注口土器についても考えておきたい。土器の編年からいえば、この時期は称名寺Ⅱ式から堀の内Ⅰ式にあたると思われる。このIV期以降になると、瓢箪形注口土器は大きな変化が現れる。それは口縁部直下の範囲が狭くなっても、口縁直下につけることにこだわり続けていた注口部が、くびれ部より下側の胴部分に配置されるようになることである。また文様も主に沈線で描出されるようになる。

1は長野遺跡から出土した土器で、他と比べるとやや古相の土器で、第10図21や23の直後の段階と考えられる。胴部には渦巻き文を施文して、渦巻きの先端には円形貼付文が施文されている。胴部に貼付されている把手には両方向に穴が開けられ、また口縁部の把手も同様と考えられ、前段階の様相を残している。

他にあげた2、7、11～13の注口土器はほとんど形状が似通っているもので、もはや形状的には瓢箪形の様相は示していないが、注口を中心とした側面部には、上下方向に貫通する把手が付いており、瓢箪形注口土器の痕跡がそこに認めることができる。胴部に配置されるという、注口部の位置の変化からすれば、これ以降約手状の注口土器に収束されていくと考えられ、厳密に瓢箪形注口土器と言える土器形態は前段階で終息し、第11図に挙げた注口土器は、瓢箪形系の注口土器と考えた方が良いと思われる。

3 瓢箪形注口土器の位置づけについて

前項において瓢箪形注口土器の変遷について、I期からIV期に分けて様相を窺ってきた。次に、年代的な位置づけについて考えてみたい。I期とII期の時期については、中期末葉から後期初頭の土器群の編年と関連して、近年問題となっている状況にある（橋本1994、谷井・細田1995など）。谷井彪氏はこの問題に対し、新たに椀山類について分析を行い、加曾利EⅢ式に椀山類の大半が伴うものの、新相とした椀山類に関しては、加曾利Ⅳ式に下がるとした（谷井2003）。これに従えば、今回分類したI期とII期の称名寺Ⅰa式を伴わない土器群が加曾利EⅣ式の古段階、II期のうち称名寺Ⅰa式を伴う土器群が加曾利EⅣ式の新段階となるようである。

今回の分析でI期としたのは吉井城山類の上下の文様が分帯されている段階で、吉井城山類や椀山類の新しい様相を示す段階であった。当初はI期が加曾利EⅢ式土器、または後期の加曾利EⅣ式土器のどちらかに収束されるはずとの見通しをもったが、新相の吉井城山類や椀山類の土器がこの時期の主体を占めており、口縁部文様帯を持つ土器がほとんど見られないこと。住居跡の形態では柄鏡形住居跡の出現、また瓢箪形注口土器など注口土器の発生などから考えれば、明らかに前段階と異なる1つの段階が存在していると今回の分析では考えられた。

II期については、その中で称名寺Ⅰa式を伴わない土器群についてI期と同じ段階にすることは、今回の分類の結果からは考えられなかった。確かに称名寺Ⅰa式を伴っている土器群とは、瓢箪形

注口上蓋の様相からいっても、新山関係が生じる可能性はある。しかしながら、Ⅱ期の称名寺Ⅰa式を伴わない土器群においては文様が単位文化しており、単位文化していないⅠ期とは明らかな相違がある。またこの段階は、梶山類はほとんどみられず、岩坪類の土器群がみられるようになってきている。吉井城山類についても単位文化し、前段階とは時間差があるとし考えられない。谷井氏の指摘するように称名寺Ⅰa式に新旧があると想定するならば、今回の分析ではⅡ期の称名寺Ⅰa式を伴わない土器群がその古い段階にあたるとも思われるが、細分は今後の課題としたい。

以上、谷井氏の分類を基にして比較すると、Ⅰ期を加曾利Ⅳ式古段階、Ⅱ期を称名寺Ⅰa式と併行する加曾利Ⅳ式新段階とするのが自然な形のように思われる。

このⅠ期については従来、中期終末とされている。しかし、瓢箪形注口土器がこの期を境に発生することや、ほかの上層群の様相の変化などから、ここに1つの画期があると考えられよう。この変化を中期の上層群の終末的な様相とするのが、または後期の土器群の初頭的な様相とするのかは今後の課題であるが、今回は1つの画期として指摘することにとどめたい。

時間的には瓢箪形注口土器はⅡ期とⅢ期に多く出土しており、それから瓢箪形注口土器が中期末に主体的に出土する上蓋ではなく、後期初頭に主体的に出土する土器群であることが明らかとなった。

また瓢箪形注口土器の終息に関しては、Ⅳ期以降の注口部分が、口縁部に位置からくびれより下の胸部に移動したことによって大きな転期となり、厳密な瓢箪形注口土器が終息を向かえたと、今回の分析からは考えられた。この変化は鉢形注口土器とも関連し、注口土器が統一化する一步とも考えられる。この時期は称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式期にあたり、上層群全体が変化する時期とも一致しており、瓢箪形注口土器も決して周辺の上層群の変化に無関係ではないといえよう。逆に瓢箪形注口土器からいえば、この時期が1つの画期となっていると思われる。

4 おわりに

今回、瓢箪形注口土器を集成し分析を行った結果、瓢箪形注口土器は従来いわれてきた中期末葉を主体とする土器ではなく、後期初頭に位置付けられる土器であることが明らかになった。その発生の時期に関しては、口縁部文様帯がなくなり上下分帯された吉井城山類、梶山類などの微隆起縁文土器の発生、住居跡においては柄鏡形住居跡の発生など、後期の要素が揃い始める時期、一つの画期となる時期に発生していたことが明らかになった。また瓢箪形注口土器の終息の時期は、称名寺Ⅱ式の段階にあたることも明らかとなった。これら発生の時期や終息の時期に関しては、周辺地域、あるいはさらに広域な地域までを含めた土器群の様相との整合性をとっていくことによって、さらに明確になっていくと考えられる。今後はそれらを踏まえ、鉢形注口土器との関連や瓢箪形注口土器の分布の範囲なども視野にいれながら、課題としていきたいと思う。

最後になりましたが、今回本稿をまとめるにあたり、橋本勉氏、金子直行氏からは有益な示唆をいただきました。石塚和則氏には、整理中の忙しいなか資料見学、実測図など便宜を回っていただきました（狭山市森ノ上遺跡については、2004年度刊行予定）。また資料見学に際しては、下記の方々や関係の機関から御教授、ご協力を得ました。記して、感謝申し上げます。

荒井世志紀・猪股佳二・小川知幸・黒澤哲郎・松田富美子・佐倉市教育委員会・大栄町教育委員会・香取都市文化財センター・印旛都市文化財センター

引用・参考文献

- 青木英代子 1983 『皿沼遺跡発掘調査報告書』白岡町文化財調査報告書第1集 白岡町教育委員会
- 秋田かな子 1997 『注口土器の美』(第8回 足もとに眠る歴史展図録)
- 今村杏爾 1977 『称名寺式土器の研究』(上下)『考古学雑誌』第63巻第1・2号
- 石坂 茂 1985 『荒砥二之瀬遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 池谷信之 1990 『編取・堀之内型注口土器』『縄文時代』第1号 縄文時代文化研究会
- 内田儀久 1979 『江原台』佐倉市教育委員会
- 上村昌男他 1990 『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報』I 国分寺市遺跡調査会
- 上野真由美 1999 『南北朝跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第214集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 女塚和志他 1986 『下佐野遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 恩田勇他 1994 『北原 (No.9) 遺跡』『宮ヶ瀬遺跡群II』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 金崎佳生 1982 『上納豆内遺跡』『河内下郡遺跡群II』福島県郡山市教育委員会
- 可児瀬宏他 1995 『多摩ニュータウン遺跡No.67遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告代18集 東京都埋蔵文化財センター
- 金子直行他 2004 『浅間東遺跡IV』町内遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県松伏町教育委員会
- 轟多圭介 1989 『長岡地子ヶ原遺跡』印旛都市文化財センター発掘調査報告書第31集 印旛都市文化財センター
- 栗田剛久 1992 『多田遺跡』東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VII 千葉県文化財センター
- 桑原 護 1974 『生谷塊制遺跡』『飯重』佐倉市教育委員会
- 後藤和良他 1972 『千葉市源町すき山遺跡発掘調査概報』『貝塚博物館紀要』第5号
- 小宮山克巳 1995 『宿前II遺跡』上尾市遺跡調査会調査報告書第14集 上尾市遺跡調査会
- 坂本行広 1995 『キサキ遺跡』香取都市文化財センター調査報告書第30集 香取都市文化財センター
- 佐々木勝雄 1984 『帷子塚遺跡』横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会
- 斉藤弘道 1987 『南三島遺跡3・4区』『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16』茨城県教育財団文化財調査報告書第44集 茨城県教育財団
- 斉藤弘道 1987 茨城県教育財団
- 末武直剛 1988 『神々遺跡群III』印旛都市文化財センター発掘調査報告書第16集 印旛都市文化財センター
- 鈴木徳雄 1990 『調査研究集録 第7冊 特集 称名寺式土器に関する交流研究会の記録』横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1992 『編取後期注口土器の成立』『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会
- 高川 博 1980 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』千葉県文化財センター
- 谷井彪・細田勝 1995 『関東の大木式・東北の加曽利E式』『日本考古学』日本考古学協会
- 谷井 彪 2003 『縄文時代中期終末と後期初頭の接点—腕山頭をめぐる—』『埼玉県立博物館紀要』28
- 田中和之 1992 『八幡沼遺跡』埼玉県蓮田市遺跡調査会報告書第16集 埼玉県蓮田市遺跡調査会
- 丹野雅人 1982 『多摩ニュータウン遺跡昭和56年度』東京都埋蔵文化財センター調査報告代2集 東京都埋蔵文化財センター
- 丹野雅人 1985 『注口土器小考』『東京都埋蔵文化財センター研究論集』III 東京都埋蔵文化財センター
- 長沢宏昌 1996 『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集 山梨県教育委員会

- 長沢宏昌 1997 『大月遺跡』山梨県教育委員会
- 中山俊之 2002 『六崎青船台遺跡(第10次)』印旛都市文化財センター発掘調査報告書第194集 印旛都市センター
- 中山良他 1993 『羽沢大遺跡跡: 泉羽羽沢閉地内遺跡発掘調査団
- 並木 隆 1978 『裏慈恵寺東遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第33集 埼玉県遺跡調査会
- 西山太郎 1986 『微塵起線文土器群の変遷と分布』『千葉県文化財センター研究紀要』10 千葉県文化財センター
- 新津 健 1993 『川又坂上遺跡』山梨県文化財センター調査報告第75集 山梨県教育委員会
- 西山太郎 2003 『團華型注口土器考』『印旛都市文化財センター研究紀要』3 印旛都市文化財センター
- 橋本 勉 1994 『原山坊ノ在家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第144集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本 勉 1994 『中妻三丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第159集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 人見映朗 1984 『南三島遺跡1・2区』『電ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10』茨城県教育財団文化財調査報告書第27集 茨城県教育財団
- 吹野富美夫 1999 『前田村遺跡C・H・I区』『伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4』茨城県教育財団文化財調査報告書第146集 茨城県教育財団
- 本間 宏 1990 『北向遺跡』『東北横断自動車道遺跡調査報告7』福島県文化財調査報告書第232集 福島県教育委員会
- 御堂島正他 1988 『新戸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告17 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 宮崎朝雄 1976 『嵐谷田端前遺跡』岩槻市遺跡調査会
- 山口康行 1992 『指原下戸遺跡』大宮市遺跡調査会報告第39集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一 1992 『下加遺跡』大宮市遺跡調査会報告第35集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一他 1995 『B-53号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第53集 大宮市遺跡調査会
- 山田尚友 2002 『水深五遺跡(第3次)』さいたま市遺跡調査会報告書第3集 埼玉県さいたま市遺跡調査会
- 和田隆次他 1985 『南三島遺跡6・7区』『電ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11』茨城県教育財団文化財調査報告書第30集 茨城県教育財団
- 渡辺清志他 1998 『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集 埼玉県埋蔵文化財センター
- 和田哲他 1998 『七ツ塚遺跡3』日野市埋蔵文化財発掘調査報告55 日野市遺跡調査会
- 渡辺俊夫 1982 『砂川遺跡』『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4』茨城県教育財団文化財調査報告XVI 茨城県教育財団

研究紀要 第19号

2004

平成16年7月26日 印刷

平成16年7月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社